

生活科・社会科における考現学手法の活用 — 絵本『町のけんきゅう』の地域学習副読本利用 —

Practical Use of Modernological Methods in the Life Environmental Studies and the Social Studies: A Picture Book Entitled “*Machi-no-Kenkyu (Field Studies on Our Town)*” as a Supplementary Textbook for the Regional Studies.

茶谷 薫 CHATANI Kaoru
(音楽学部教養部会)

はじめに：考現学と今和次郎

考現学とは昭和のはじめに今和次郎（こんわじろう）が「考古学」を振り提唱した学問分野である⁽¹⁾。考「古」学は遺跡から出土した「古」い時代の「古」い物を科学的に分析し、過去の時代を知ろうとする学問分野である。対照的に考「現」学とは「現」代社会のさまざまな事物を調査、分析し人々の風俗や時代の世相を読み解こうとするものである。Archeology（考古学）に対して Modernology（モデルノロジー）という英名も考案された。ただし study of modern social phenomena という英名の方がその実態を良く表している。

今和次郎は 1888（明治 21）年、青森県弘前市で医師の五男として誕生した。1906（明治 39）年、東京美術学校（現在の東京藝術大学美術学部）に進学しデッサンの研鑽を積んだ後、1912（明治 45）年に早稲田大学の建築学科に助手として就職した。1917（大正 6）年、農商務省の高級官僚であった柳田國男の調査に同行するようになった。その頃から日本各地の民家を多数スケッチし、民家研究を深めていった⁽²⁾。今による民家研究は当時日本に併合されていた朝鮮半島でも行われた。ちなみにこの柳田とは無論、誰でも名前だけは知っている著名な民俗学者である。後年、柳田は考現学を始めた今を破門したとも伝えられる。一方、柳田は今を破門したつもりはないと語っている⁽³⁾。

閑話休題。民家研究を続けた結果、今は人文地理学にも興味を広げ、大学では都市計画、造園等に関する講義を行った。また後年に民俗学者の宮本常一を支えたことでも有名となる渋沢敬三宅にもこの頃出入りしている⁽⁴⁾。当時、渋沢は東京帝大生であった。現在も巷間よく知られているように彼は渋沢栄一の孫であり、廢嫡された父・篤二に代わり栄一の跡継ぎとなった財界人である。その一方で、元々は動物学者になりたかった渋沢は柳田らに会ったことで知的好奇心を刺激され民俗学に深く傾倒した。民俗学に熱心な余り、学生でありながら自宅に私設の博物館である「アチックミュージアム」を作ったことでも知られる。「アチック (attic)」とは「屋根裏部屋」という意味である。この「屋根裏美術館」

は現在の大阪吹田市の万博記念公園に設立された国立民族学博物館収蔵資料の母体ともなっている。財界人・銀行人としての渋沢敬三は横浜正金銀行ロンドン支店にも駐在したことがある。この時、スウェーデンやノルウェーの民俗博物館を訪れ、今にもそこへ行くように勧めた。今は欧米視察旅行に出掛けた 1930 (昭和 5) 年に渋沢の言葉通りにしている。1934 (昭和 9) 年、渋沢らは漸く、アチックミュージアムを母体にした郷土資料陳列所を開所させた。その際、今は専門分野の住居展示に携わった⁽⁵⁾。渋沢は同年に設立された日本民族学会にも理事として加わっている。このように渋沢は財界人としての信頼も厚かったが、学者としての生き方もできた人物であった。以上の今和次郎と渋沢敬三のエピソードからも分かるように考現学は人脈的にも研究分野的にも民俗学、民族学とも深く関連している。

今が渋沢邸を初めて訪れた数年後の 1923 (大正 12) 年 9 月朔日、関東地方で大地震が発生した。この地震による未曾有の大災害が関東大震災である。彼は地震発生翌月、美術学校の後輩や若手芸術家とともに東京の銀座に「バラック装飾社」を設立した。震災で住処を失った人々はバラックを建て風雨をしのいでいたが、そのバラックを美しくし生活を潤すための仕事を全て引き受けるという運動体が今らの設立した「バラック装飾社」である。「バラック装飾社」はダダイズムに溢れるデザインでバラックの壁に絵を描くなど、翌年 6 月頃まで活動した。「バラック装飾社」の仕事を芸術至上主義的立場の人々が激しく批判したが、今は芸術家の魂から発する美とは別に、世相や風俗に宿る美の存在がある、と主張した。今の発言は当時ほとんど理解を得られなかったが、現在、建築家の藤森照信はその先駆性を高く評価しているという⁽⁶⁾。その評価はともかく、震災後にバラックを多数スケッチしたことが、今を考現学に目覚めさせることとなった。

今は 1925 (大正 14) 年、「バラック装飾社」を起動させた銀座で考現学調査を行った結果を「銀座街風俗」として雑誌『婦人公論』に発表した。その内容は銀座を歩く人々の服装や髪型などを調査した結果を示したもので、美術学校出の才を活かした分かり易い図も付けられた。これから二年後、今は「しらべもの (考現学)」展覧会を新宿の紀伊國屋で開いた。「考現学」という言葉がここで初めて出てきたのである。更にその三年後の 1930 (昭和 5) 年、美術学校の後輩である吉田謙吉とともに考現学を意味する『モデルノロデオ』を出版した⁽⁷⁾。その後は今の提唱した考現学から、生活学、風俗学、赤瀬川源平らによって有名になった路上観察学が発生した。考現学が人々の生活を直接的、間接的に調査、分析する手法だったからこそ、生活や風俗の観察が生まれ、今の発想により身近で当たり前過ぎて観察や記録が行われない日常を観察することの面白さが人々に伝わったのである。

生活科および社会科における考現学の位置付け

高度経済成長以降、赤瀬川原平 (筆名の一つが尾辻克彦、本名は赤瀬川克彦) らの路上観察で有名になった考現学は面白おかしいものとして消費されがちであるが、現在の社会

風俗や人々の生活を切り取る優れた手法の一つであることを忘れてはならない。例えば地下鉄や名古屋鉄道に乗っている人々が何をしているか、という観察をし、十年前のそれと比較すると、いかにケータイ（携帯電話）やスマホ（スマートフォン）、ゲームをしている人が増えたかが良く分かる。つまりこの十年で急激に、良し悪しは別として、携帯型の通信機器、ゲーム機器が我々の生活と深く関わるようになったことを示している。今和次郎が銀座で行った人々の服装調査を現在同じ場所で行えば、和装の人が激減していることも定量的に示されよう。

このような考現学は黒坂裕之や中田奈月が述べるように、生活科や社会科の地域学習において有力な観察手法となる^(8, 9)。文科省の指導要領解説に拠ると^(10, 11)、2008（平成20）年、中央教育審議会は「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」の答申を行った。その中で「思考力・判断力・表現力等の育成」、「豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実」などを基本的な考え方として示した。前者のために「観察・実験、レポートの作成、論述など知識・技能の活用を図る学習活動を発達の段階に応じて充実させ」、「記録、要約、説明、論述といった学習活動に取り組む必要がある」と提言した。後者のためにも「体験活動の充実により、他者、社会、自然・環境とかかわる中で、これらとともに生きる自分への自信を持たせる必要がある」と指摘を行っている。当然、考現学では「観察、記録」は欠かせない手法であり、その記録を理解し、他者に伝えるためには「レポート作成、論述、要約、説明」という学習活動も不可欠である。考現学は中教審の提言にも沿う手法を使っているのである。

とりわけこの答申を踏まえて改訂された社会科や生活科は考現学の手法を取り入れると充実するであろう。その理由をまず生活科に絞って以下、縷々述べる。生活科は1989（平成元）年に新設された時以来、「人や社会、自然とかかわる活動を充実し、自分自身についての理解などを深めるよう改善を図り」、「生活科の特質は、直接体験を重視した学習活動を行うこと、身の回りの地域や自分の生活に関する学習活動を行うことなどにあり」、「それらの学習活動において、自分の生活や自分自身について考えさせ」、「生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ」、「自立への基礎を養っていく」ことが教科目標であった⁽¹⁰⁾。生活科の指導要領解説では2008年中教審答申を踏まえた上でこの目標に向かうための改善方針が次のように述べられている。「人や社会、自然とかかわる活動を充実」させ、「気付きの質を高め、活動や体験を一層充実するための学習活動を重視」していくことである。知的な「気付き」とは「対象に対する一人一人の認識であり、児童の主體的な活動によって生まれるもの」であり、「次の自発的な活動を誘発するもの」と説明されている。また活動を繰り返すことで児童生徒「と対象とのかかわりが深まるといふ。物事を客観的に把握し、同時に自分自身をも客観視するためにもこうした繰り返しが重要なものはいうまでもない。両者は表裏一体だからだ。生活科指導要領解説の「改善の具体的事項」では気付きの質を向上させるために「例えば、見付ける、比べる、たとえるなどの多様な学習活動

の充実」をすべきと提言されている。「見付ける」、「比べる」は考現学の重要な要素であり、小学校の生活科において考現学的な手法を用いる妥当性がここでも明確となる。また改善案として「活動や体験したことを振り返り、自分なりに整理したり、そこでの気付き等を他の人たちと伝え合ったりする学習活動を充実」させ、「活動や体験したことを言葉や絵で表す表現活動を一層重視」するとも述べられているが、「整理、伝え合い、言葉や絵で表す」ことは今和次郎の時代から考現学では当たり前のように行われているのである。

また社会科の指導要領解説⁽¹¹⁾では上記の2008年中教審答申を踏まえ、社会科、地理歴史科、公民科について「社会的事象に関心をもって多面的・多角的に考察し」、「社会的な見方や考え方を成長させることを一層重視」し、「社会的事象に関する基礎的・基本的な知識、概念や技能を確実に習得させ、それらを活用する力や課題を探究する力を育成」するために「社会的事象の意味、意義を解釈すること、事象の特色や事象間の関連を説明すること、自分の考えを論述することを一層重視」し、「我が国及び世界の成り立ちや地域構成、今日の社会経済システム、様々な伝統や文化、宗教についての理解を通して、我が国の国土や歴史に対する愛情をはぐくみ、日本人としての自覚をもって国際社会で主体的に生きる」ような方向で改善するように求めている。そのために小学校では「生活科の学習を踏まえ」、「地域社会や我が国の国土、歴史などに対する理解と愛情を深め、社会的な見方や考え方を養うこと」、「身に付けた知識、概念や技能などを活用し、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うこと」、「作業的、体験的な学習や問題解決的な学習を一層充実させ」、「観察・調査し」たことを「的確に記録し、比較・関連付け・総合しながら再構成」し、「自分の言葉でまとめ伝え合うこと」が重視されるようになった。そのために「我が国の国土や地域に関する内容について、環境保全、防災及び伝統や文化、景観、産物などの地域資源の保護・活用など」を重んじることも求められている。観察、調査によつて的確な記録をしたものを比較し、互いの関連付けを行い、自分の言葉でまとめて発表し合うこともまさしく考現学の手法その物である。観察対象が神社仏閣や祭礼、地域の行事等ならば伝統や宗教を含む文化の客観的な把握に繋がることは言及するまでもない。

考現学絵本『町のけんきゅう』

『町のけんきゅう』は対象年齢・学年が「小学生から」となっている絵本である⁽¹²⁾。サブタイトルは『世界一のけんきゅう者になるために』となっており、考現学の研究を知らない初心者向けの解説書でもある。ただし初出から絵本として制作された作品ではなく、福音館書店から刊行されていた『おおきなポケット』という雑誌の1993(平成5)年4月号に掲載されたものが母体となっている。初出に大幅加筆を行い完成したものがこの絵本である。『おおきなポケット』は1992(平成4)年4月に創刊された小学生向けの月刊誌で、2011(平成23)年3月号まで十九年間刊行され続けた雑誌である。つまりこの絵本が小

学生向けであることは初出誌からしてそうだったというわけだ。絵本『町のけんきゅう』のうち前半に置かれた物語は考現学に長年携わってきた岡本信也、岡本靖子夫妻が執筆し、伊藤秀男が表の表紙と共に絵を付けた。これ以外の文章や絵（図）は岡本夫妻の手によるもので、夫妻が愛知県を中心とした日本国内の町で採集、記録したものの一部が掲載されている。そのため子ども向けの考現学入門絵本でありながら大人にとっても考現学の結果報告書として読める構成となっている。

本文は39ページあり、絵本としては頁数が多い方だろう。漢字も使われているが全てにルビが振られ、言葉も難しくはない。上記で述べた通り、前半と後半の大きく分けて二つの項目から成り立っている。前半は24ページまでで、「町のけんきゅう（考現学）」をしている両親とともに幼い娘がカメラを持って町に出掛け、さまざまな事物を記録していく、という内容である。娘はカレーライスなどカレーを使った食べ物調べと、幟と旗の調査、という二つのテーマを研究することになっている。父親は缶の蓋、火鉢など使わなくなった様々な物を植木鉢に転用したもの、物売りの声の三種類、母親は物干しと干し方、お婆さんの履物、店員のエプロンの三種類を調べていることになっている。

25ページから39ページにわたる後半の最初と最後の頁には子ども向けに考現学研究をする手法が詳述されている。文字が小さく多いので小学校一年生には難しいかもしれないが、教員が解説すれば理解できるだろう。具体的には記録の取り方と整理の仕方、変化を調べる方法、町のさまざまなことに気付くことから始める考現学の醍醐味、等について分かり易い言葉で記されている。整理方法の説明は町で観察した事物を葉書大のフィールドカードに記入することから始まる。カードには発見場所・年月日・発見者（子ども自身）といった基礎データとともに事物の写真やスケッチを貼り付け、注意点、気付いた点などを文字で記入する。カードが沢山できたところでそれらを並べ身近な人と会話し、それに纏わる様々な話を聞くことも勧められている。更にある特定の事物を多数集めたり、数量変化や時間変化を集計したり、定点観察結果比較とも謂うべき特定の場所で見られた事物の時間的変化を分析したり、記録したものを地図に落として分布図を作成したりといった小学校低学年生には少し難しいが、実践すれば思考力が身に付く考現学の方法が示されている。

26ページから38ページには前半の物語では出てこなかった考現学の成果の一端が示されている。最初の方には食品トレー、郵便受け、玄関の灯り、エアコン室外機の置き方、電車の乗客の座り方、仕草、吊草の持ち方、足の組み方、傘の持ち方、等々が分かり易い絵と言葉で事例が示されている。それに続けて他にも町中で働く交通整理員、掃除をする人、手拭いやタオルの被り方、荷物の持ち方、カップルや親子の手の繋ぎ方、頭髮、バックの種類、髪形、銭湯で見た男性下着、傘や乳母車の様々な利用法、様々な物品や場所を使った物干しの方法、看板、ゴミ置き場の様子、車止め、足跡、定食を食べる順序、モーニングセットの種類など子どもにも親しみやすい事例が多数挙げられている。またこれとは別に上記の解説頁（39ページ）には他にも身の回りでできそうな研究例が30例近くも

挙げられ、考現学初心者へのヒントとなっている。また奥付のページには書籍情報、執筆者紹介とともに「あとがき」が記されている。あとがきの内容は考現学の紹介と本の成り立ち、実際に町を歩いてみよう、というものである。

この絵本によって子どもたちは、前半では主人公の少女になった気持ちで彼女と両親の行動を追うことで研究について「何となく」方法が把握でき、後半で更に様々な研究対象が身近に溢れていることと、研究の具体的な方法を詳細に知ることができるのである。もちろんこれは大人でも同じことが言える。

『町のけんきゅう』の生活科および社会科に於ける価値

前々項で述べたように生活科は児童生徒の身の回りの社会や人、生活に関わる活動、直接体験を通じ、彼ら自身の理解を深め、生活に必要な物事を身に付けさせ自立の基礎にしていくことが最大の目標である。『町のけんきゅう』に列挙された身の回りの事物の観察例はまさしく彼らの生活、身の回りに密着したものである。例えば、カレーライス、食品トレイ、モーニングセット、給食・朝食・夕食メニュー、冷蔵庫の中の物、好きな食べもの、カレーライスの夕飯はどのような時か、一ヶ月にどのくらいの量を食べているか、などは子どもたち（大人もそうだが）の生を支える食事がテーマとなっている。この観察をクラス全員で行い、グループで見せ合って話し合えば、自身の食生活を客観的に理解する端緒となろう。また定食を食べる順序や食べ終わった後の割り箸の置き方は食にまつわるマナーを意識させる契機ともなろう。

食以外のテーマも重要である。例えばお婆さんの履物、物売りの声、店員のエプロン、交通整理員、掃除をする人、手拭いやタオルの被り方は児童生徒の生活と密着する町の人々の存在を意識させることができる。掃除をしてくれている人々や猛暑極寒の中、交通整理で事故を防いでくれる人々の働きに対する「気付き」ともなろう。電車内の乗客の着席方法・吊革把握方法・足の組み方・傘の持ち方などは食事同様、乗車マナーの意識向上にも寄与するであろう。家にある靴の全調査、冷蔵庫の中、朝食・夕食、休日の過ごし方などの観察を行えば、家庭生活の客観視に当然繋がっていく。

ゴミ置き場やゴミ入れ、空き缶や空き瓶の置き方、不用品などを観察することで、美化意識も高まり、自分が出すゴミを対象化し、自身の廃棄行動をも考えさせることもできる。物干しの仕方や乳母車を本来の目的以外で利用する方法などは祖父母を含む保護者に対する新たな視点も与える。

上で記した給食以外にも、筆箱の中身、好きな食べ物、子ども部屋比べ、幼い頃のこと、テレビ視聴時間、好きな番組やタレント、お小遣い、クラス全員の靴のメーカー調査、将来の職業、玩具箱などは他の級友と比べることで親しみも増し、自分の家が中心の児童生徒の視野を広げることに資する。

定期的に観察を行い、フィールドカードにまとめをし、それを元に語り合ったり、集計・

比較などして分析したり、ということは、上述したようにまさしく生活科の改善方針にある活動の繰り返しによって対象との関わりを深め、「見付ける、比べ」、「伝え合」い、活動・体験を「言葉や絵」を用いた「表現活動」を行うことそのものである。また体験的かつ身近な物事に触れることは生活科で重視されている幼児教育からの接続ともなる。こうした活動は、小学校生活への適応、基本的生活習慣の育成、教科等の学習活動への接続にも寄与するであろう。

社会科に於いてもゴミ置き場、車止め、様々な看板、交通整理員、清掃従事者、店員の服装、様々な履物や物売り、様々なものの値段調査、幟や旗、テレビ視聴時間と番組、遠足や修学旅行、靴のメーカー、不用品など『町のけんきゅう』に挙げられた事例や、この書籍には掲載されていないが考現学で研究対象となっている祭り屋台、郊外としての駅、中心都市にある駅、などの研究は地域社会や我が国についての理解を深め、社会的な視点や考察能力を高めていくことに寄与するであろう。地域研究を通じ、居住区域や学区への愛着も高まり、より良い社会を維持、発展させていく意欲の下地も作られよう。また観察結果を文章やグラフで纏め、それを発表し、クラスメイトの発表も聞いて感想を述べ合う、といった活動を行うことは、統計学や国語の能力を涵養することともなる。

以上のように市井の人々や彼らの行動、人々が作り出し、転用する物、人々が行う事、といった日常生活を記録することそのものを楽しみ、その活動を通じて世相、風俗を客観的に把握する考現学は生活科や社会科の地域学習における主要な柱となる。その考現学を子ども向けに分かり易く解説した『町のけんきゅう』は生活科および社会科の副読本としても有効である。また一般の大学生は考現学を知らない。この本はそのような学生にも親しみ易く分かり易い、そして巧みな図で多数の例を解説している点でも優れ、それが生活科指導法や社会科指導法での副読本としても好適である所以である。

考現学の成果をまとめ、発表するには、今和次郎や岡本夫妻のように観察を重ね、それを記録し、図と文章を駆使したレポート（まとめ）を作成することが欠かせない。これは学習指導要領の改善方向に示されたことそのものである。また文科省（そして世界）が目指す、知識基盤社会化、グローバル化の時代を「生きる力」の基礎ともなる。上述したように考現学は民族学や民俗学とも深く関わっている。グローバル化社会では異なる文化・文明を理解し、それらと共存すること、その上で異文化間での国際協力を目指すことが一層不可欠となっていく。その時に他者の生活（文化）を知り、それを鏡にして自己の生活（文化）を客観視することは欠かせない。裏返して謂えば自国の文化を客観的に認識していくことと並行し異文化も理解していくことが不可欠なのである。考現学、民俗学、民族学はその基礎となる学問分野なのだ。

また『町のけんきゅう』では大きく扱われていないが、最後の「あとがき」で「とにかく、あわてず、ゆっくりと」町歩きをしよう、ということが記されている。これは交通事故への注意喚起とも取ることができる。生活科の学習指導要領では「安全教育」の「充実」

を謳い、登下校時に事故や事件に巻き込まれないようにすべきことを記している。要は通学路の様子を調査させ、見守りをしてくれる近所の人々に関心を持たせ、通学路を歩くための安全確保を子どもたち自身にさせるわけだが、考現学観察を行う際にも安全教育は欠かせない。子どもは観察のために危険地帯に入り込む可能性もあり、観察に熱中する余り車への注意を怠り交通事故の危険性が増加することも充分考えられる。市井の人々に事物への質問をする際に危険な人物に誘拐されるリスクも排除せねばならない。

また小学生では然程問題にならないかもしれないが、大学生が実習・演習で考現学調査を行う際、観察対象となる人々や事物のプライバシーへの配慮が必要であることも注意せねばなるまい。例えば家の表札を観察、記録する場合、人々の様子を写真撮影する場合などは当然のこととして、発表時にも観察対象が誰か特定されないよう、名字や住所をぼかしたり、変えたり、人々の顔や服装が直接的に分かるような写真を用いるのではなく図で示したり、といったことが必要になってくる。近年は主に言論人でもない市井の若者がツイッター、フェイスブックなどの SNS で迂闊な投稿をしてしまい、所謂「炎上」という事態に陥ることが時々起こるようになった。例えば著名人がアルバイト先に来店したといった情報をアップロードしてしまい大問題になった事例もあった。当然、そのような問題を起こすことなく生活科、社会科における観察技術としての考現学を学ばせる必要があることは論を俟たない。また著名人ならずとも一般の人々のプライバシーも尊重されるべきであり、そのためにはどのように記録・発表を行えば良いかを考えさせることはインターネットとは無縁ではいられなくなった世界における「生きる力」の涵養ともなる。

謝辞

本稿は岡本信也氏、岡本靖子氏ら主宰の名古屋を活動拠点とした野外活動研究会の存在がなければ、また佐宗圭子氏がこの会があることを教えてくださいなければ書かれることはなかった。また『町のけんきゅう』の存在を知ったのもこの会でのことである。ここに感謝する。

文献および註

- (1) 今和次郎、1987、考現学入門、ちくま文庫
- (2) 今の民家研究については 1989、『日本の民家』、岩波文庫などがある。
- (3) 川添登、1987、『今和次郎』、リプロポート (2004 年、ちくま学芸文庫)
- (4) 田村善次郎編、宮本常一、2008、『宮本常一著作集 50 渋沢敬三』、未来社。なお宮本常一と渋沢敬三については佐野眞一、1996、『旅する巨人 宮本常一と渋沢敬三』、文藝春秋 (2009、文春文庫) が分かり易い。
- (5) 丸山泰明、2013、『渋沢敬三と今和次郎』、青弓社
- (6) 岡村健太郎、2014、『バラック装飾社』、『現代美術用語辞典 ver.2.0 - Artscape』、WEB マガジン・アートスケープ

<http://artscape.jp/artword/index.php/%E3%83%90%E3%83%A9%E3%83%83%E3%82%AF%E8%A3%85%E9%A3%BE%E7%A4%BE>

- (7) 1986年、学陽書房から復刊された。
- (8) 黒坂裕之、1994、小学校社会科・生活科における「地域学習」と考現学、教育研究所紀要、3号、45-51頁、文教大学
- (9) 中田奈月、2013、小学校生活科社会科における「観察」の内容—社会調査法との照応、奈良佐保短期大学研究紀要、21号、13-24頁
- (10) 文部科学省編、2008、『小学校学習指導要領解説 生活編』、文部科学省
- (11) 文部科学省編、2008、『小学校学習指導要領解説 社会編』、文部科学省
- (12) 岡本信也、岡本靖子、伊藤秀男、2002、『町のけんきゅう』、福音館書店